

古平がむじ

年表で読む 古平の歴史

《93》

発行・古平町史編纂室
文化会館 842-2590
第187号・平成17·4·1

古平のサメ漁

■サメ漁の記録

古平の雑魚漁としてサメ漁の記録をまとめたところ、大正以前は原稿でわずかに六行分。これでは到底足りないので、昭和二年当時の新聞記事などを合わせて紹介する。

日本での記録では、サメは享保年間(一七一六～一七三六・徳川吉宗の時代)、干物やサメ油を製造し、後には当時の清国(現在の中国)への貿易品として、価格が高騰したとある。

北海道では明治になり、本州から出稼ぎに来ていた漁夫によって、函館方面で漁獲された

のが始まりといわれている。

古平での最も古い記録では明治四五年(一九一二)、サメ延繩で七、二五キログラムを漁獲し、生売りでの価格が一四八円とある。当時、岩内では年平均して約一三〇トンもの漁獲があつたという。種類は、いずれもアブラツノザメ(道立水試)である。

ところどころで昭和二年一二月二〇日の北海道新聞に、次ぎのような記事が掲載された。「古平」数年間不漁続きの近海鮫刺網漁は本年は漁期が遅れ、一月二〇日過ぎから二月中旬まで続き、近年にない大漁で、動力船六隻が期間中大小約四万五千本、一本一貫平均と見てざつと二十二万円と

なる。このうちカマボコの原料として小樽方面にも送られたが、採油されて代用食用油や重油モビル、マシン油などとバター(物々交換)されることになつていている。

古平では戦前からかなりサメ漁が盛んであった。一月頃はサメの産卵期に当たるのか、陸揚げされたサメから鰐卵を割

焼きにして食べるところもあつた。魚肉はほとんど食べるところなく、焼いたものを煮付けてしたり、でんがく(田楽)などにして食べるくらいだつたようである。

■サメは危険?

サメと聞くと「人食いサメ」という印象の方が強く、物語や映画の世界でも、どうしてもワル者のイメージが残る。しかし、世界中で、サメによつて命を落とす人は九人(一九九一統計)で、猛獸や毒蛇の被害から見るとはるかに少ない。

一方で人間は、年間約七〇万

人のサメを漁獲して食べている。一尾一〇〇キログラムとするところと七〇〇万尾で、北海道の人口の約一・二倍である。してみると、むしろ危険なのは実は人間の方だといえる。

日本でも、年間三万・ほど漁獲し、そのほとんどはすり身、はんぺん、かまぼこなどに加工されるほか、料理ではぬたとして賞味されている。

その他ビタミンAが豊富にあり、骨の粉末は栄養剤、化粧品の原料や制ガン剤としても利用されている。

■サメの特殊な感覺

また、サメは独特的の機能を備えていて、人間のもつ五官(耳・舌・鼻・皮膚)という感覚器官のほかに、わずかな振動や圧力を感じ取る器官も合わせ持つてているといわれている。数キロメートル離れたところの魚などの音、一〇〇万倍に薄めた血の臭いなども嗅ぎつけるといふから、よくサメを観察しているたら、地震や天気の予報にも役立つかも知れない。

<2>

せたかむい

4月号 (No.187)

▼一〇月四日

起床七時、曇天、寒さに向かい天気も荒れる。悦三を連れて浜へ出て見る。避難船四隻が停泊している。外に余市通い二隻がアメリカから入港して来て、港内は賑やかだ。悦三は船を見るのが大好きで大喜びだ。一日中雨降りで道路も悪い。この日、共立大謀でブリハ〇〇本余り揚がつたとのことだ。

▼一〇月五日

起床七時、陽が差すと心地よい時季だ。妻は午前中、支店おかげさんと農園へキノコ取りに行く。共立大謀から改良三〇丸電話で注文があり、馬車で届ける。自転車で銀行へ行き、帰りに入船町大謀を回る。今日もブリ二〇〇本程獲れたとのこと。今月に入つてからブリ大漁で、浜は活氣づく。夜、困で部落の会合があり行く。

▼一〇月六日

秋晴れの好天気、海も山も涼風が立つて心地良い。熊さんと妻は、朝早くからイモ掘りに農

4月号 (No.187)

4月号 (No.187)

園へ行く。父も天気の良いときは気晴らしで気持ちが良いと、後からワラジ掛けで農園へ行く。加瀬さんの赤兎が死んだといふのでお悔やみに行く。夜に浜へ出て見る。避難船四隻が停泊している。外に余市通い二隻がアメリカから入港して来て、港内は賑やかだ。悦三は船を見るのが大好きで大喜びだ。一日中雨降りで道路も悪い。この日、共立大謀でブリハ〇〇本余り揚がつたとのことだ。

▼一〇月七日

時々あられが降り寒空だ。
おつかさんが佐渡から帰られ行く。

▼一〇月一〇日

時々雨が降る。銀行の帰り、
おつかさんが佐渡から帰られ
行く。

▼一〇月一二日

昨夜來の雨、今日も一日中降り通しだ。こんなに雨の降ることもない。農作物も雨の多いのには困る。店は閑散だ。海は時代化で、寒くてまるで冬のようだ。日も短くなつた。震災に遭つた人達もだんだん寒くなるので困ることだろう。

▼一〇月一三日

ようやく天気も快晴になつた。父と熊さんは農園行き。毎日雨では煙の仕事も遅れるので、生懸命だ。明日天気が良ければ小樽へ用達に行くことにした。

高野名幸作さんの日記から

[98]

阿波君、今日でも来るのかと待つていてが来なかつた。大久保さんのところへ行き、和合会のことにつき相談する。本年だけ掛け金を続けることにした。一〇時帰る。

ろ閑散としている。坂崎と安藤宅へするめを二把宛て小包で送る。夜、禪源寺で造林思想普及宣伝の活動写真があり見に行く。

大入りで混雑、一時間程見て帰る。寒い寒い夜だ。

朝から雨が降り、寒風が吹き海は時代化、晚秋の模様になつた。

農園の仕事はダメなので、父も手伝つて、えびす倉の片付けを

やる。阿波君が遊びに来る、いろいろ話題、昼食を出し、一時頃帰る。坂崎から先の震災で綿糸工場は無事だったのに、綿糸の注文は受けられるという。坂崎安蔵の方は被害があつたという。品代の残り四八〇余円を郵便為替で送金する。銀行為替がためなので、これでは不便で困る。時代で風が強く、こたつでもほしい。夜、大鶴間へ遊びに行き、一〇時帰る。

起床六時半、海岸を散歩する。大謀網を起こしている。川畑まで散歩する。川崎船勇丸に冬森行きのアバ繩を積み込む。海

は昨日来時化になつた。浜中からは船は出ない。正午、阿波君が古宇から来る。すいぶん心配しつが、まずは上首尾でよかつた。午後一時頃、新地まで用達に行き、帰り、ヨリに寄りしばらく話し

やる。阿波君が遊びに来る、いろいろ話題、昼食を出し、一時頃帰る。坂崎から先の震災で綿糸工場は無事だったのに、綿糸の注文は受けられるという。坂崎安蔵の方は被害があつたという。品代の残り四八〇余円を郵便為替で送金する。銀行為替がためなので、これでは不便で困る。時代で風が強く、こたつでもほしい。夜、大鶴間へ遊びに行き、一〇時帰る。

やる。阿波君が遊びに来る、いろいろ話題、昼食を出し、一時頃帰る。坂崎から先の震災で綿糸工場は無事だったのに、綿糸の注文は受けられるという。坂崎安蔵の方は被害があつたという。品代の残り四八〇余円を郵便為替で送金する。銀行為替がためなので、これでは不便で困る。時代で風が強く、こたつでもほしい。夜、大鶴間へ遊びに行き、一〇時帰る。

鯉粕二三五〇円、数の子一四〇〇〇円くらいの相場では大変な損害だ。カニ繩手持ち分、一把一八錢で正に売る。

▼一〇月一八日

今日、小樽から帰る。阿波君のところへ行く。仲谷組合長からの連絡があり、一六日から組合に出勤するようとのこと、良かった。私もこれで責任を果たし安心した。この夜、平田さんではムコ入り、△では嫁入りとのこと。

▼一〇月一九日

天気快晴、この天気で秋仕事も忙しい。父は未明の五時頃に起き、農園へ行く。心地良いと言つて、わらじ掛けで元気で働いている。私は留守中の用向きをする。今日はボカボカして暖かい。仕事には申し分ない日和だ。夜、幸おつかさん死亡につき通夜に行く。

▼一〇月一〇日

天高くして馬肥ゆる、小春日和で気分の良い日だ。父は相変わらず六時頃起き、ワラジ掛けで一生懸命だ。今日はダイコン抜き、熊さん妻コノさん等も

行く。土曜日で学校も午後は休みなので、幸治、文治、吉治等も手伝いに行く。ボカボカで暖かく、家中で戸外で働くのも楽しいかも知れない。店では刺綱用綿糸、ロープ、など五〇円程が売れる。△内室の葬式を送る。小樽岡崎ヘダイコン一六〇本、共栄丸に積み込み送る。六時頃一行が烟から帰る。家族も大勢いるが、皆どこも悪いところもなく、こうして元気で暮らしていくけることは実にありがたいと、感謝せねばならぬ。

▼一〇月一一日

今晩から暴風が激しくなり、警戒している。九時頃からはいつそう甚だしい。午後一時から火防組合が巡回する。消防組も警戒に出ている。新開町△付近に建てていた△の一〇軒長屋が、この風で倒れた。請負者は大した損害だろう。風は七時頃になつてようやく静かになった。

▼一〇月一二日

昨日の暴風はずいぶんひどかつた。漁船は幸いに皆無事だつたとのこと。共立大謀から改良繩三〇丸注文ある。本年はアバ

繩の売れ行きが順調で、好成績の方だ。今日まで赤岩と婦美へ手伝いに行く。ボカボカで暖かく、札幌へ転住するというの手で、家財などの残品をセリに出している。父が行って来たが、特別家で欲しいものも無かつたと

六〇〇〇円売る。内、二二五〇円、沖村一〇〇円など、合計約〇円、佐原一〇〇円など、合計約三〇〇〇円は手持ち分合計三〇〇〇円はありう。来春二、三月までは大抵売れ行きあるだろう。五時頃△仲谷さんへ、阿波君組合に採用の礼に行き、しばらく話を

して帰る。後、港町△に行き改良繩の在庫を調べる。今日は良い天気、どこの家でもダイコンの始末に一生懸命だ。

▼一〇月一二三日

今日も幸い好天氣、熊さん、父と出面二人で農園へ行き、井戸付近に石を積むとのこと。共立大謀から改良繩三〇丸の注文がある。今年は大謀漁が思わしくなつてようやく静かになった。

▼一〇月一四日

朝から雨が降る、寒く空は黒く、今にも雪が降りそうだ。私は

熊さんと△の倉へ行き、アバ繩の片付けをやる。一〇時頃帰る。次で札幌へ転住するというのを聞いていたが、特

別家で欲しいものも無かつたといい帰つて来た。雨は一日中休みなく降り続く。寒いので奥にこたつをかけた。

▼一〇月一五日

寝ていてもずいぶん寒い晩であつた。起きて戸外を見ると屋根も白くなつて、一面に真っ白だ。子供等もたび、股引きなどと冬支度に騒いでいる。この寒さでは、震災の罹災者は困つてることだろう。それにしても衣食住に別に不満はなく、幸福に感謝せねばならぬ。

▼一〇月一六日

吹く風も身にしみ、寒い寒い天気になつた。浜へ出て見る。大綱網も本年は一向に大漁景気がない。積丹岳はもう真っ白くなつて、父は農園へ行く。苗木

▼一〇月一七日

朝夕の寒さは初冬の候だ。父

は出面と竹、さきりの後片付けでなかなか忙しそうだ。月末になつたので、日録書きをやる。店は刺繡支度で、アバ綱、綿糸、口一匹などがポツポツ出る。

▼一〇月一八日

天気快晴、秋始末には申し分ない天気だ。悦三は汽船を見るのが大好きで、一日に二、三回

は必ず行く。海辺の景色は良いものだ。夜、困へ遊びに行く。

▼一〇月一九日

今日はこの頃で珍しい暖かい日和だ。秋の晴天はどこも冬支度で忙しい。大根の始末などあり、この好天は何よりだ。父は今

は大不作で食用にするものも無い。49号が五〇斤程あるだけだ。私は銀行、後月末の集金に歩く。今日はイカが大漁で、多いところは千ぐらいもとつたという。浜も活氣づく。

▼一〇月三〇日

起床六時、この頃は天気もよく気分も良い。朝、浜を散歩する。大謀が網起こしをしている。本年は一般に不漁で人気も引き立たぬ。大謀用品の売り込み

もこの不景気では困る。何とかひと漁あつてほしいものだ。熊さんが掛け取りで、三〇〇円程集金ある。海産物、魚粕八月頃には三七〇〇円ぐらいだったものが、一二四〇〇円程に大暴落。大打撃を受けたが、この頃二〇〇円程上がつた。そうだが、この程度では大損害だ。数の子一本一

〇円で買ったものが、八〇円ぐらいにまで下落したが、この頃九〇円ぐらいになつたとのことで、しかし、これでも大損害だ。海産商は皆大打撃、綿糸は目下二五〇円というのが相場だ。

▼一〇月三一日

今日は珍しい快晴だ。小春日和とはこんな日だろう。学校で挙賀式がある。私は留守番なので欠席した。正午から観楓会があるので、私は洋服の軽装で参加する。泥の木学校の川原の広場に、万国旗やアーチを立てて準備もよろしい。川原はきれい

で、見晴らしもよい。一時頃まであちこち歩き、一時半に川原にゴザを敷いて始まる。一五〇人ぐらいは来ているようだ。泥の木方面の手伝いの人も沢山い

る。米田農会長の挨拶のあと酒宴、酒一合、汁粉そば、古平産米のご飯、鶏鮭料理などのご馳走ですいぶん食べた。三時半頃、千鳥足で帰る。珍しい。帰りに阿波君のところに寄り、また二、三次会が始まる。八時頃まで飲んで帰る。

▼一一月一日

曇天で寒空だ。試食会を兼ねた観楓会は実に秋らしい好天。

一〇月末の気候としてはめったにない暖かい日であつた。帰り阿波君のところに寄つて、一次会やつたせいで、今日は二日酔いで気分が悪い。酒やタバコはのむべからざるものと感じた。今

後は大いに注意せねばならぬ。午後、自転車で新地へ行つたが、ハンドルを握る手が冷たかつた。また雪玉になつた。妻は練漬け造りに忙しい。夜、杏鶴間へ遊びに行き、話をして一〇時半帰る。

▼一一月二日

今日は朝から雨が降つていたで、見晴らしもよい。一時頃まであちこち歩き、一時半に川原にゴザを敷いて始まる。一五〇人ぐらいは来ているようだ。泥の木をやる。店は閑散。平田さんの病

状はますます悪いので、和合会の事務の仕事が私のところへ來た。また、世話をことだが、仕方がない。悦三は汽船を見るのが大好きで、店に来ては、「ブー」と汽笛のまねをする。雨でも行かねばならぬ。こんな雨の日でも

▼一一月三日

六時起床、海岸を散歩し、学校前を通つて農園まで行く。四方の山々は赤く、木の葉も大分散つた。すっかり晩秋の景色だ。

セ若林所の板倉一棟あつたが、堀内で一棟うちで一棟買つた。一間に三間で古いが、一〇〇円なら安いので買った。

▼一一月四日

天気快晴、平田さんが今晩一時死亡されたとのことで、熊さんが手伝いに行く。夜、通夜に行く。

今日は朝から雨が降つていたが、一〇時頃になり、どうやら晴れた。沖村大謀がサバを船に積み込んで売りに来る。皆が大安売りだと言うので、買いに集まる。家でも六〇銭分買い焼き干

しにした。熊さんは、平田さんの手伝い、私は一時から禅学会（禪源寺）があり行く。会員の集合が遅れ、始まつたのは三時頃だった。和尚の講話があり、後、夜食を馳走になり、その後また本堂で説教五時に帰る。早速、平田さんの通夜に行つたが、お参りの人が大勢いて二階に上がる。一〇時帰る。

（禅源寺）があり行く。

かも知れない。一二時半帰る。午後からカマボコ製造の実習があり、妻が行く。

▼一一月八日

朝からチラチラ雪も降つて寒い寒い日だ。海も時化て冬らしくなる。父は、今日で寺参りの最後だと言つてお参りに行く。妻は午後から、水産講習のカマボコ造りの実習に行く。私は留守番だ。町を歩く人は皆外套や角

巻を着て、冬景色となる。
雪国の女性にとって冬の必需品
←角巻(くまき)



今日は珍しく天気快晴、太陽がテカテカ輝き小春日和だ。熊さんは平田さんへ手伝い。父は未明に起きて寺参りする。私は平田さんの葬式を送りに行つたが、神葬祭でなかなか賑やか。近頃珍しいので、見る人も大勢集まっている。平田さんもどうとう逝かれた。帰つたのは一時半であつた。

▼一一月七日

六時半起床、海岸を散歩したが寒くなつた。父は未明に起きて寺参りに行く。この頃は丈夫になつたようだ。九時半、水産組合での講話を聞きに行く。大羽イワシの話で、講師は向井技師。明年からはイワシ網が流行する

家へ帰る。今日から重助大工が来て、店のガラス戸を直す。これで開閉の具合が良くなつた。台所にも障子を立てた。いよいよ冬ごもりの準備だ。妻は朝から水産講習へ行く、造つたカマボコで、今日はカマボコ料理だ

という。午後、銀行へ行き預金をする。帰り三時に寄り三時帰る。

▼一一月一〇日

起床六時半、例によつて海岸の散歩だ。サバ漁があり、町売りが歩く。一〇銭に五〇尾とのことだ。妻は水産講習へ行く。ソボロ造りだとのこと。午後、熊さんと農園へ行き、畑のリンゴの木の切るところを見回る。6号・

58号などで、およそ一一、三本切ることにした。夜、杏へ遊びに行く。

▼一一月一一日

起床六時半、まだ電気がついている。海岸を散歩した後、港町えびす山の宮（現在の厳島神社）へお参りする。高台で見晴らしのこと、実際に気も晴れ晴れする。重助大工が来て、七時からまたあるので妻が行く。から買った板倉の手直しをする。父と熊さんも行く。妻は水産

講習会も終了し、証書の授与があるというので九時頃行く。一

〇時頃、新地で火事だというの

で大騒ぎ、早速駆けつけた。正の裏の新地学校付近から火の手が上つていて、正へ行き手伝いをしたが、そのうち学校に燃え移つて、学校は全焼した。一時過ぎ下火になり、ようやく鎮火した。風はほとんどなく、昨夜は雨が降り、それに日中だつたことが幸いした。もし新地の市街で燃え移つたら大変なことだつた。一時過ぎに帰る。火の用心が第一だ。

▼一一月一二日

起床六時、今日は方向を変えた。禪源寺前から原田さん、梅野さんの烟を通つて、新築中の隔離病舎を見に行く。眼下、盛んに建築中だ。ここには来たくないものだ。午後二時から禪源寺にて、東山布教師が来て、説教がある。この説教が有益な講話であった。午後六時からまたあるので妻が行く。

教科書のいまむかし

◇復活した教科書

新しい教育には新しい教科書一といふことで、歐米のものを翻訳した教科書が多く使われるようになつてきました。

理科の教科書について見ますと、「物理訓練」とか「天変地異」などといったものがありましたが、これらも歐米の本からの翻訳で、その紹介といつものでした。

当時、学術の面で最も遅れを感じていたのは技術面や自然科学面でしたから、理科教育には力を入れましたが、それは「科学する心」を養おうというものではなく、出来上がった科学的な知識をそのまま紹介したものでした。

これは江戸時代の有名な学者であった佐久間象山の唱えた「東洋の精神、西洋の芸術(科学技術)」がよいといふ、和魂洋

才(わいんよつさい)という思想が、指導者の考え方を支配していたからです。

中略

その中の一冊『天変地異』は、自然に起ることとの法則をやさしく説明して、一般の迷信をなくしようとしたものです。その中には「雷除けのこと」「地震のこと」「彗星(流れ星)のこと」などについて書かれていて、

「昔、知識のなかつた時代には、雷は悪い神が叫んでいるといつて人々は恐れていたが、フランキリン(フランクリン=雷の正体は電気であることを証明した)という人が出て、雷の正体を正しく説明できるようになつた。また、雷を避けることのできる道具(避雷針)も出来て、人々の幸せも限りなく広がつた。」

◇道徳の中心に孝行

ところが、明治十三年の改正教育令によつて、今までの教科

の順位では最下位にあつた修身が、逆に教科のトップにおかれようになり、これまでの、歐米の自由思想を取り上げていた教科書は廃止されることになりました。

このような考え方に対しても

福沢諭吉は『極端論』という本で大いに反論しましたが、国家権力に対しては効果がありませんでした。

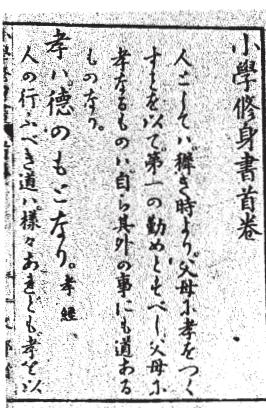
明治十三年、文部省から新しい修身の教科書が発行されました。これには、まだ少しは歐米の影響も残つていましたが、全般的には、江戸時代に盛んであった儒教(孔子の教え)の考えに立つた道徳色の濃いものでした。

そして、明治十六年、文部省の『小学修身書』になると、もう歐米人の書いた本や人名、格言などはすべて無くなつて、その代わり、先に出でいた『論語』や『孝經』などを取り入れたものが多くなつてきましたが、そこでは何よりも「孝行」が重視されていました。

なるものとす」と教え、「孝は徳のもとなり」という『孝經』の言葉を掲げています。なおこの時期の修身の教科書には、菊の紋章を浮彫りにしたものがありました。

← 小学修身書

人として擇き時より父母に孝をつくすを以て第一の勤めとすべし、父母に孝なるものは自ら其外の事にも道あるものなり孝は徳のもとなり 孝經人の行なぶべき道は様々あれど孝を以



◇古平御役所へ続き

名主が発行した、江差から古平への漁出稼者の通行手形が残されています。

←通行手形



右は西地古平表へ鲱漁業出稼に越候余無相違候 己上
江差名主 江差名主
岩山稚次郎

同様に古平から旅へ出る者も、通行手形が無ければどこへも行かれませんでした。

◇古平開拓出張所

新政府によつてすべての仕組みが変わりましたが、古平を含め

て、後志沿岸の住民にとっての大変革は先の場所請負人の廃止令でした。西部一三郡の請負人にとっては死活問題であると從来の事情を陳情した結果、場所持ちということで一時はしのいだものの、今後どうすべきか、時代の変革に請負人はとまどいました。

場所請負人の廃止によって、

名称も運上屋は※本陣、番屋があればこれを脇本陣と呼ぶこと

港町の字名にもなつていきました。請負人の廃止について元請負人に對しては何の補償もなく、一般の出稼人と同じ取り扱いでしたが、役所に勤めるといつてになると、開拓権少主典(給与として現米三〇石)という役職に任命されました。

フルヒラ 種田徳之丞
任用 拓権少主典
右宣下候事
巳十二月

地元自治の移り變わり

あればこれを脇本陣と呼ぶことになり、古平では入船町にあつた番屋が脇本陣となりました。

勤務地についても、永住したいところがあれば家族を連れて行くことも自由とあります。が、請負人でこの職に止まつた人は居なかつたようです。

※ そのことから、当時の人たちはチヨヘタン川左岸(海側から見て右側)近くを、また、時には右岸の川べりを含めた地域を本陣と呼んでいました。宝海寺門前の橋(一号橋)辺りから上流はチヨペタン(錠邊潭)と運上屋の倉庫があつたという意味)と呼んでいて、

錠邊潭農事實行組合

←錠邊潭農事實行組合 ゴム印

と表記されますが、この中では運上家となつてゐますのでそのままの表記にしました。

開拓使の役人が直接行なうようになつた)となつた古平の状況を、新北海道史から取り上げてみます。

「いま古平場所を例に、官捌制へ移つていつた状況を見ると、

運上家の使用人は、明治三年四月から本陣取締り・帳役・手代などに、また、四年三月から収税会所手代・小使として任用され

ている。ただし元運上家支配人などの上級使用人は、漁業經營や駅通業務などで活動することになる。また、運上家支配人であつた種田徳之丞は本陣用達とされ、代人喜三郎の年給は八〇両とされた。さらに収税石高の三分を受けて本陣を委任され、駅通をも担当している。また旧運上家と付属施設や諸道具は四、三三〇両で買い上げられたようである。(以下略)

※ うんじょうやは一般に運上屋と表記されますが、この中では運上家となつてゐますのでそのままの表記にしました。

わたしと葉書

大澤文子

早朝から太陽がカツと照りつけると、あー 北国にも、ようやく春が……と躍動感にこころがうずく。窓辺近くに置いたアーチロンの蕾も、一気に花を咲かせた。

「いいなア」 ふ一つとペンを置き、花びらに触れてみた。指先に触れる春の感触。
「うーん こんな時、海を越え遠地に住む歌友に便りを……と思う。
「しばらくねえ、お元気ですか。もう歌稿だしましたか？ わたしはまだねえ、先日、街であなたに似たうしろ姿を見かけましたよ」

机の前に座り、コーヒーのカップに歌友の笑顔を思い出す。そんな時、手近にハガキがあるとすぐ書ける。

私の机の片隅には、和紙で作られた小物入れがある。積丹の歌友からの贈りものである。そ

どちょっと普段着のままの文章では書けない。
昭和の初期に「掌編小説」といった人があり、はやったことがあった。フランスのコントが流行したすぐそのあとだったの

の中には、常にハガキが十数枚は入っている。
現在ハガキは五十円、「一銭五厘の時代から、ハガキ程安く便利で楽しいものはない」とは、今は亡き父の持論であつた。

勿論、父の書斎のハガキ入れには、ハガキのきることはなかつたであろう。

その頃、私は月に一度は父の家を訪問していた。が必ずといつていよい程、父の姿は書斎の中にあつた。私はそのうしろ姿にむかつて挨拶をするのが常だつた。

教え子さん達がたびたび遊びに見えるのが楽しく、健やかにすごか日々多かつたのである。だが、翌日にはもう教え子さん達に礼状を送つていたらしくなりうるというもの。

仲良しの歌の友、恭子さんは必ずハガキの片隅に、受け取る人の好みの花を色鉛筆で美しく描き送られているが、すばらしことの楽しみは老化現象防御となろうというもの。

老木となつたそのめぐりには、細い木の柵が張りめぐらされ傷みをおさえている。
「菅原道真公」を想い出させてくれる。

お参りする人々の心をこんなにも癒してくれる『飛梅』……。まだ季節毎に見事な花を咲かせたいいたしく見えたが、まだ花……と言えば、北海道では

何年ぶりかの大雪で多数の事故に見舞われ、悲喜こもごもとうところなのに、内地ではひととき温暖の日が続き、梅の便りも早く届いた。

そんな時、ふと何年か前、次府天満宮に遊んだ日々を思い出した。

その頃書いた厚い『思い出記』ノートを繰つてみた。

II 東風吹かば

にはひおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れそ
かの有名な菅原道真公を慕つて飛んできたという謂れのある

老木『飛梅』

細い木の柵が張りめぐらされ傷みをおさえている。

いたいたしく見えたが、まだ『菅原道真公』を想い出させて

くれる。

お参りする人々の心をこんなにも癒してくれる『飛梅』……。ようやく書き終えた真夜。私は稿を續じ、積む雪のため、暗めるベランダのカーテンを静かに引いた。

ふるさとの春を想う

吉川義雄

前号の『せたかむい』に、うつかり入院したことを書いたの

で、高野名正治兄から、その後

のことを心配されて、有り難いお便りを早速いただき。同郷の人達は本当にうれしい存在と思う。

お便りの末尾に、「古小入学生、今年は二十二人と、小子化困ります。……」と。今度は、こちらがやたら心配になる一行があつた。

◇

豊かな環境の中につかっていると、その有り難さなど、人は分からなくなることは確かだ。

生まれた時から海が在つて、雪が解ける頃になると、前浜はやたら賑やかになる。七色に輝くニシンが、来る日

も、来る日も水揚げされ、男も女も喜んでいるのか悲しんでいるのか、連日の労働に疲れ果て

て、ムスッとした顔にへばり付くウロコの数だけが多くなる。

ようやく、自家用のニシンを片付け終わる頃、ヤレヤレと笑顔を見せた親達の顔に安堵した子供達も、夏の本格的な遊びに入る。

◇

春とニシンが別個なものになつたのは、ふるさとを離れて、私が札幌に住んでからのことだから、その深刻な悲しみや苦し

みは分からぬ。ただ、物知り顔に、「ああすれば、こうやれば」と、批判するだけ。

所詮、魚は獲ればいなくなるのは当たり前で、松前から、寿都や岩内も昔はニシンの大漁時代があったのだ。

◇

積丹半島は意外な程、根付き

の魚は種類も量も少ない。冒頭の「古平の漁業」を見ても推定

できる。

戦後。

古平に、ニシンがまだ

ケラケラ訪れていた頃、若手の

漁師達が思い切って発動機船を

手に入れ、石狩湾白尋線に挑戦

した。それまで邪魔モノ扱いを受けていた、スケソウ漁の始ま

りである。

◇

昭和一四、五年以降、古平はスケソウの大漁で浜は沸き立つた。

発動機船も、当初は使い古し

た寿都、岩内辺りの古船を購入していたが、あつという間に古平の船大工の手で新造船が造られ、これ見よがしに遊弋し出した。

た。

革命は、若い生命がやるもの

ではない。ただ、物知りらしい。

◇

スケソウは根魚である。

古平の若手漁師の大成功を、他

町村の漁師が黙視しているわけ

はない。美國、余市、忍路、さらには高島の船団まで、白尋線

に密集するハメになつた。

網の上に網を差し込む戦場になつた漁場の調停に、漁師達は

何十日も漁業会に集まつては、口からアワを飛ばし合つた。

スケソウ時代は何年続いたのか。

いずれにせよ、ニシンを忘れさせ、一気にふるさとに活氣を取り戻した功績は甚大だ。

ニシンに育てられたような私

の小学生時代、一年は何人い

たのやら、一教室は六十人程度で三教室は必要みたいだった。

本校といわれた浜町の学校に

行けるまでは、新地、沖村、そ

の他の分校に分散されていた。

大変な数の子供達が、ニシン

やスケソウに育てられていたよ

うだ。

◇

仏法に「依正不二」という大事な言葉がある。環境と自分とは常に不可分な関係にあり、別々に存在しているものでは無

いと。世界中が、この大哲理の意味を何回も問い合わせられる程、幾度も間違ひを犯し続けている。

自分のやつたことをみつめた

思ひがけぬ朗報！　隊長の通訳から、M先日、公演の後に嘆願した映画観覧の件が許可になり、来週にでも一般公開の予定ですとの知らせでした。

驚きと喜びで、みんなが躍り上りました。あの時、「少し待つてて下さい」と言われた約束どおり、私達の念願をかなえてくれたM隊長の許へ早速何人かで駆けつけ、心からの感謝の意を述べました。

M隊長は、「今まで白樺楽団が私達を楽しませてくれました。今度はよい映画を沢山持つて来て、日本人に楽しんでもらいますから、仕事にも励んで下さい。」と、温かい言葉で、逆にこちら

が勵まされる結果でした。いつも、深い愛情をもつて私達に接してくれるM隊長を見ていると、本当に、権太で日本人と戦った軍人なのか？と、疑念を抱かせるような不思議な人でした。

苦境の中で やがて、待ちか
の安らぎ かねていた映画
上映の日がやつてきました。
映画館は押しかけた大勢の観客
で、超満員の盛況でした。入場
が無料ということだけではな
く、みんな映画が恋しかったの
です。上映されたのはソ連映画
でしたが、歌と音楽とバレエが
ふんだんに盛り込まれた美しい
総天然色で、そこにはソ連一流
の芸能人が活躍する、心の躍る
ようなまことにばららしい映画

いに表現され、日本の田島選手が三段跳びの世界新記録での優勝や、水泳の前畑選手が二百メートル平泳ぎで見事優勝した場面では、館内に大きな拍手と歓声が響きわたり、思わず感動に浸りました。

久し振りの映画に観客も大満足で、第一回の映画会は盛会のうちに終わりました。

異郷の地で　この後も、週に名画に再会　一度か二度は上映されましたが、その度に映画館は満員の状況でした。

そのうち、ソ連以外の国の映画も上映されるようになり、古い映画でしたが、アメリカの『オーケストラの少女』とか『踊るニューヨーク』や『チャップリンの街の灯』、ドイツの

上映されるフィルムは、回を重ねることに新しいものに変わつてきました。戦争中に作られた各国の名画が、次々と公開されたのです。そのほとんどは戦後になつて日本でも公開され、各地で大評判となりました。アメリカ映画の『駆馬車』『哀愁』『カサブランカ』、フランス映画では『舞踏会の手帳』や『格子なき牢獄』『望郷』などを見ることができたのは意外の幸せでした。次週が待たれ楽しみでした。

映画を見ている間だけは、重苦しい現実から解放された憩いのひとときで、こうした機会をもつてくれたM隊長には、心から感謝しておりました。

戰中彈

泣き笑いの 樺太漁場体験記

戰後彈

でした。

さすがに芸術、文化共に古い歴史を誇るソ連作品と敬服しました。もう一本の映画は、昭和一一年のベルリンオリンピックで、ナチスドイツの名画『美の祭典』でした。各国選手の活躍ぶりが躍動美として画面いっぱいに表現され、日本の田島選手が三段跳びの世界新記録での優勝や、水泳の前畑選手が二百メートル平泳ぎで見事優勝した場面では、館内に大きな拍手と歓声が響きわたり、思わず感動に浸りました。

久し振りの映画に観客も大満足で、第一回の映画会は盛会のうちに終わりました。

異郷の地で　この後も、週に名画に再会　一度か二度は上映されましたが、その度に映画館は満員の状況でした。

そのうち、ソ連以外の国の映画も上映されるようになり、古い映画でしたが、アメリカの『オーケストラの少女』とか『踊るニューヨーク』や『チャ

テカルロ』など、いずれも若い頃夢中になつて見た名画にまた出合いました。名画というものは、何回見ても新しい感動が湧いてくるものです。画面と共に古き良き時代の懐かしい情景をよみがえらせるからです。

上映されるフィルムは、回を重ねることに新しいものに変わつきました。戦争中に作られた各国の名画が、次々と公開されたのです。そのほとんどは戦後になつて日本でも公開され、各地で大評判となりました。

アメリカ映画の『駄馬車』『哀愁』『カサブランカ』、フランス映画では『舞踏会の手帳』や『格子なき牢獄』『望郷』などを見ることができたのは意外の幸運でした。次週が待たれ楽しみでした。

映画を見ている間だけは、重苦しい現実から解放された憩いのひとときで、こうした機会をもつてくれたM隊長には心から感謝しておりました。

作連

—地質調査の旅(4)—

白岩町から余市橋の調査に移る前、私は買い求めたばかりのトランジスター・ラジオを宿へ持つて行つた。一番懽んだのは平尾だった。

戸數十戸かそこらの零落れた
ような集落での夏の夜は、若い
私たちに退屈極まるものだった。
无聊を癒してくれるのは、ラジ

オから流れるムード音楽しかない。折しも一九五〇年代後半のわが国は、世界各国から送られてくるマンボやジャズ、ロックといった、後に古典となつて残る粒選りの歌曲が溢れるようになつた。流行した年でもあつた。「セレ

「ソローサ」「マンボNo.5」「ポルトガルの洗濯女」などが記憶にある。そして、圧倒的な

坂本甚衛

思い出として脳裏に蘇るの
画「慕情」の主題曲である
この映画は、初め平尾が
で帰札した際に観て来て、
勧めたものだつた。雨で仕
ならぬある日、彼と私は札
行き日劇でこの映画を観た
尾は一度目というわけだ。
身でいえば、映画のメロド
調には余り感心しなかつた
平尾の感激度は頂点に達し
一トへの帰り道、狸小路の
ード店で、高校の同級生だ
というその店主の伴から主
のレコードを手に入れ、一
て水割りを飲んでいる私
で、一晩中原語で唱和し、
も歌うことを勧め、終には
私が全歌曲を覚えて
つたほどだった。

彼に引き摺られたわけで

思い出として脳裏に蘇るのは映画「慕情」の主題曲である。

思い出として脳裏に蘇るのは映画「慕情」の主題曲である。

いが、元々が映画狂いだった私はこのようにして東京時代に引き続き、またも映画鑑賞が飯よりも大好き人間に化していった。

映画好きという意味は、それに付随する主題歌も当然の

橋の試錐個所は定石通り左岸と右岸各一か所ずつと、木橋の中 心地点の計三か所であった。今 さら口にするまでもなく、この 河口は地底のちょっとした砂礫 層を過ぎれば、橋脚（ピア）が 建つ部分全て砂の層になる。

大昔から流れ堆積した砂の層は、地下二十五米の最終試錐終点まで達してもなお続いていた。悠久の営みを目にすると瞬間である。上から粗砂、細砂、微細砂と幅較して続く。粗砂と微細砂では橋脚の保持力でも、たいした差があるようにも思えぬが、事実は微妙に異なる。(と先輩技官から教えられた)

特筆すべきは、左岸を終えた二本目の河の中、個所の際、初めて真新しい真鍮管に採取したコア（核・資料）を手を触れず、

に移し替える作業がつけ加えられた。こんなに神経を使う作業もそうはない。内径五・六センチ、長さ八十センチ前後の筒状空き缶にである。空気に晒さぬよう砂の資料を入れたら、入口をパラフィン（蠟）で密閉して

から蓋をするよう指示された。←

「板さん、いつものヤツ！」

「納豆と板前」と思つてゐる。

鮨屋で仕上げに頼むのは、「究極の手巻き」と決まっている。

シャリに山葵だけの手巻きなの
だが、これが旨い。板前さんの
お勧めなのだが病みつきになつ

納豆は大豆大粒の豆をたいたいたものが上等。小粒やひき割りはまだしも、チューブ入りの納豆にいたっては、一度と行くまいと心に決める。ついでに、「私

る板前が良い。旬の肴を小気味よくさばく姿を、カウンター越しに見ながらの会話がなんとも楽しいものだ。

終わつたら土木試験所宛てに日通で発送、到着後、剪断や垂直加重試験、または歪み（ひずみ）や強度実験に引つ張り、といった細心かつ緻密なる各種の試験を経て、橋脚耐久力の最重要資料となるはずであつた。

私は平尾は、金物屋から七輪と木炭、及び小さな鍋を買
い、パラフィンの固まりも手
に入れて木橋上で火をおこ
し、解かす作業から始めるこ
とにした。橋の上は風の通り
がよく火のおきもよかつた。
となるところだつたが、生憎
そうはいかずアクリシデントが

一瞬にして突発した。
というように、これから繰
る本文を書きたいために、だ

らだら言わずもがなの前置きを述べた不手際を悔いるが、下手な手品師は前口上が長い、とも言うから、ひとつご寛恕を請い願うよりなかろうと思う。

板前と納豆

小川光里

てしまつた。山葵の香りと一
瞬、脳天に突き抜ける辛さが
勝負。バリッとした海苔がアシ
ス、正在するのを、言つまへん
どもでは、納豆は扱つておりま
せん」と、慄動無礼な板前など
は、論外である。

アトしているのは、
さすがに、
鮨屋で納豆だけを食へるわけ
ではない、納豆ひとつ、山葵ひ
とつに心配りする板前が好きな
のだ。創意工夫の技をひけらかす
のでもなく、自負を持ち続け
がある。

一編集雜記

—編集雑記—

▽先頃札幌の書店に立ち寄った
らコーナーに人だから。一メール
四方ほどのところに、今テレビ
で話題の『義経』関連の本が二〇
種類以上も積まれていた。去年は
『新撰組』に大変な関心が集まっ
ていたが、大河ドラマの人気には
すさまじいものがあるようだ。

▽後志沿岸部には広く義経伝説が
あるが、北は古平でどうも途切れ
ているみたいで残念。しかし、伝説
にはユメがあつておもしろい。
▽節分の厄払いが足りなかつたせ
いか、一月はせたかむいのピンチ。
健筆をふるってくれている吉川さ
ん(和櫻)、坂本さんが相次いで入院
大澤さん(櫻)は力ぜで通院、二八
度を超える発熱だったそうです

▽後志沿岸部には広く義経伝説があるが、北は古平でどうも途切れているみたいで残念。しかし、伝説にはエメがあつておもしろい。
▽節分の厄払いが足りなかつたせいか、一月はせたかむいのピンチ。
健筆をふるつてくれている吉川さん（左）と坂本さんが相次いで入院。大澤さん（右）は力ぜで通院。三八度を超える発熱だったそうです。

が、皆さん、現在は回復。「原稿が
気がかり」と、早速送つてくださ
いました。ありがとうございます。
これから的好季節を迎えて、いつそ
うのご健康を念じております。
▽町外の親戚や知人への便りに、
せたかむいを送っている方が居ら
れるようで、「送つてもらえます
か」という電話もあり、うれしい
悲鳴というところでしようか。

「クリスマスイブ」にまた来ます」と、氣分よく店を出た。ところが、究極の手巻きに氣をとられ、納豆巻きを食べなかつたことに気づき、ひとしきり悔がなんとも嬉しい。

ひかりものと白身が目当て。生姜、山葵で味わい、塩、かぼすで酒が進む。普段、言葉少ない家人も、ここに板前さんとは軽口をたたき、好物の鉄火巻をつまんでいる。板前さんの心意

る板前が良い。旬の肴を小気味よくさばく姿を、カウンター越しに見ながらの会話がなんとも楽しいものだ。

和紙人形との出会い

富山市 高橋藤藏

(元 稲倉石鉱業所勤務)

昭和四十四年六月。

私は七年間お世話をなった稻倉石鉱山を後にし、富山に転勤した。

数年ぶりに都会に舞い戻った私は、文化や娯楽に乏しかつた山奥での单调な生活を挽回しようと、休日のたびごとに富山市街を散策し、都會の雰囲気に入れる「当てのないブランリ歩き」を続けた。

そんなある日。

市内の小さな店で、ふと目についたのが和紙人形だった。私は、しばらく足を止め、じっと見入った。

目もなく、鼻もなく、手漉き和紙の素朴で单调な着物を身についた姿は、豪華な衣装をまと



たのだが、妙に私の心を惹きつけた。その後、富山市街に出たびに和紙人形を見て回っているうちに、自分の手で作れないものかと思うようになり、参考書と和紙を買い求めた。和紙の知識も人形の知識もないう素人が、ただ、参考書をたやすく、ましてや、作り方も知らないと、まことに鉄を入れ、形を作り、そして姿(しな)を整え、どうやら人形らしきものを作れるようになつた。

和紙人形の魅力にとりつかれた私は、一時期、作品作りに明け暮れる程に熱中し、平安調のおつとりとした、静かな人形を中心、雛人形・王朝の風情・曲水の宴・百人一首の色紙押し絵・水引帆船などを作り、和紙産業のさかな、富山県の展示会にも出展する程に凝つてしまつた。

人形作家のお師匠さんが見た目もなく、鼻もなく、手漉き和紙の素朴で单调な着物を身についた姿は、豪華な衣装をまと

物言わぬ和紙人形は、三十数年を経た今も、ケースの中で私を見つめたまま、じつと佇んでる。では心をなごませ、普段、押し入れで寝ている人形は、三月の雛祭り時期に全作品を座敷に飾り、一年ぶりの再会を楽しんでいる。

いを込めて作ったという白口満足があり、数少ない趣味の中でも貴重な一品となつた。

髪型・着物・柄・姿・小物など、頭で描く想像の世界。

不器用な指先で和紙を裁断しながら、糊で固めて仕上げる手作りの楽しさ。

そして、ようやく仕あがった時の嬉しさ。

山中に陣地構築

（続く）

道路の草わらに腰を下ろして待つていたら、向こうから小学生の一団がやって来た。

何気なく先頭の引率している先生を見てピッククリ！

何と私と小学校同級生の伊藤啓君ではないか……。

彼は上敷香で小学校の先生をしていたのだ。お互いに、「やアーやアー」てなもんで、小学生にはそこで休憩させ、「橘君、君は何をやつてるんだ」「俺は、今は丘隊だ」

私は階級章も付いていない作業用の軍服を着て、ゴボーケだけ腰に下げゴム長靴をはいていたので、彼は軍属で来ているとでも思つたらしい。私は雑囊からう

ずら豆の入った、人の顔程もある大きなパンを出して、食べるといふと聞くと、食べるというのでやつたが、これは戦友の川口が、特別に作ってくれた蒸しパンだつた。

このパンを食べながら、郷里の同級生の消息など話し合つたが、この樺太の上敷香に

も、同級生の田中仁、野呂素一の両君が来ていること

もわかつた。

彼等とはチョイ

チョイ会つているらしい。私も機会があつたら君の学校を訪ねるからと再会を約して別れたが、樺太の、し

かもこんな山の中の道で、小学校の

中は広いようであつても狭いも

のである。『事実は小説より奇

なり』とは、本当だ。

次に駅で一人の兵隊が乗つた。よく見ると、何と同級生の田中仁君ではないか。小学校卒業以来の再会だ。輪重（じまき）隊にいて、私の親戚になる矢代政雄軍曹には大変お世話になつた

車で彼は降りて行つた。

同級生はどこで会つても懐かしくいいものだ。しかし樺太

で、それもひと月程の間に山の

中と汽車の中で一回も会うなん

く、ここは北の果て樺太なの

だ。何だか不思議な気持ちになつてきて、思わずかんがえこん

でしまつた。

炊事の班長、大西軍曹が曹長に昇進したので、炊事の班長は下向正雄軍曹に替わつた。

六月の初めに、氣屯の連隊本部へラッパ手としての派遣命令が出た。突然の命令でとまどつたが、単独で汽車に乗つて旅をするなんて——軍隊に入つて初めてのことだけに、解放さ

れたというルンルン気分で、上敷香駅から北上する汽車に乗つた。

次の駅で一人の兵隊が乗つた。よく見ると、何と同級生の田中仁君ではないか。小学校卒業以来の再会だ。輪重（じまき）隊にいて、私の親戚になる矢代政

雄軍曹には大変お世話になつた

車で彼は降りて行つた。

同級生はどこで会つても懐かしくいいものだ。しかし樺太

で、それもひと月程の間に山の

中と汽車の中で一回も会うなん

く、ここは北の果て樺太なの

だ。何だか不思議な気持ちになつてきて、思わずかんがえこん

でしまつた。

やがて汽車は氣屯駅に到着した。四月にここを出発したときはまだ雪が残つていたが、今は春だけなわだ。連隊に着いた部へラッパ手としての派遣命令が出た。突然の命令でとまどつたが、単独で汽車に乗つて旅をするなんて——軍隊に入つて初めてのことだけに、解放されると、四中隊へ転属して行つた富田上等兵だつた。

「待つていたぞ」

と声をかけられた。渋谷上等兵

と、四中隊へ転属して行つた富田上等兵だつた。

「よろしくお願ひします」

「ご苦労さん」

と言つて、なぜ私が急に派遣されて来たのかを話してくれたが、同年兵の樺太ラッパ手の体調が悪くなつたため、替わつてもらいたいということだつた。

四日に一日の衛兵勤務だが、

ラッパを吹くこと以外に何もや

ることがない。丘管内は広いの

で、當内の歩哨は馬に乗つて見

回りをしていた。私は勤務のな

い時は退屈なので、馬の運動を

かつて出た。生まれて初めて馬

に乗つたがおとなしい馬だった

（続く）



吉平俳句会



吉平町岬短歌会

除雪車の家ふるはせて覚ましゆく

斎藤波留

校長の父まぶしけり紀元節

山口悦子

揚々と癒えし体の春めける

越野敏雄

梅二月とは云へ遠き蝦夷大地

大和田絵伊

凍雲を洩る日差やセタカムイ

高橋重子

丹精の松を折られし雪の嵩

仲谷比呂古

春潮や輝きありし湾の朝

室谷弘子

冴返る夜通し賑やか同期生

泉清三

風雪に静かに耐へる冬木立

外山俊久

春風を集めし日差しふくらみぬ

渡辺嘉之

波音に声とぎれくる猫の恋

堀典子

朝霞立ちて石狩湾見せず

本間寿昭

地吹雪の小家を呑んで終ひけり

越野清治

高き雪壁見つし来しにアパートははや春の花咲き競ひ
をり

池田テル

窓埋めし雪もやうやく低まりて明るき光り仏間に届く

鈴木時子

南は桃の花咲く三月も北国は寒き雪の日つづく

凍てし朝バスに乗る人息白く小走りに行くが病室より見ゆ

竹内コト

目の覚めるやうな黄色のミニモザアカシア冬の太陽とふよくぞ
名づけし

田中香苗

杉の梢僅かに見ゆる厨の窓日光なごめば雪消えゆかむ

東美知

早春の海面に立てる波もなくあまた出船の音の重なる

堀典子

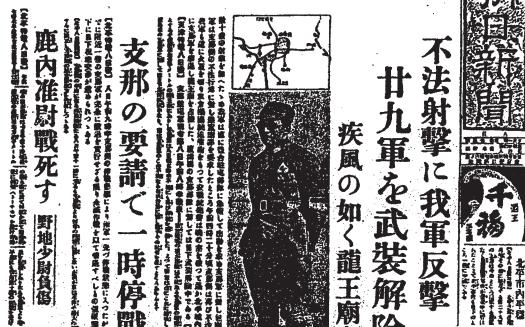


古平町史年表

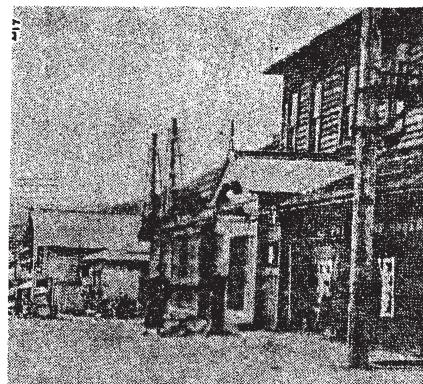
昭和 12 年 (1937) ~ 続く

- ▲ 中島グランドの修祓式が行われ、完成を記念して古平連合青年団が合同運動会を行う
- ▲ 浜町でストーブの飛び火により物置から出火したが、物置一棟だけを焼失して鎮火する
- ▲ 在郷軍人会古平町分会と古平連合青年団の共催で、初めての軍用犬訓練大会が古平小学校校庭で行われる
- ▲ 鉄道省建設局鈴木、松村の両技師ほか五人が、鉄道建設再調査のため来町する
- ▲ 蘆溝橋で日中両軍が衝突し(7月7日)、これが発端となって日支事変(後に第二次世界大戦に含まれる)が起き、これから続く長い戦争の幕開けとなる
- ▲ 札幌土木事務所長らの一行4人が、余市から陸路と海路から道路の視察をする
- ▲ 鉄道省建設局馬渕属ほか二人が、鉄道建設による経済調査のため来町する
- ▲ 浜町郵便局が電信・電話事務の取扱を始める
- ▲ 今次大戦で初めての召集令状が31人に来て、出征兵士の壮行会が古平小学校で行われる
- ▲ 余市~古平間の鉄道建設について衆議院・貴族院で請願が採択される
- ▲ 古平消防組で三輪消防ポンプ車を購入し、第一部(鷹)に配備する。これでポンプ車が3台となる
- ▲ 札幌で行われた全道連合青年団競技大会に、古平から選手2人が出場する
- ▲ 古平町銃後後援会が結成され、会長に一戸孝町長が就任する
- ▲ 古平町銃後後援会が結成され、一戸孝町長が会長に就任する
- ▲ 郷社琴平神社で、町長や在郷軍人分会などの関係者によって、出征兵士の武運長久祈願祭が行われる
- ▲ 石狩湾の底引網操業禁止区域が大幅に拡大される
- ▲ 在郷軍人古平町分会が国防献金を呼びかけ、中央劇場と古盛座で映画会を行う

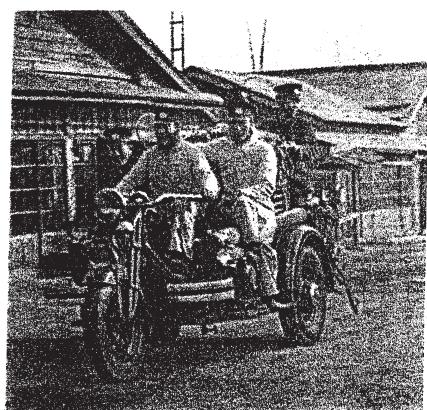
突撃軍兩支日で外郊平北



↑ 日支両軍の交戦を伝える新聞記事 (朝日新聞)



↑ 大正 11 年 5 月開局した浜町郵便局局舎



↑ 町内を巡回する三輪消防ポンプ車